
時事ネタＳＦショートショート劇場『ヒ素ウイルスとワールドカップ』

8 4 g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時事ネタSFショートショート劇場『ヒ素ウイルスとワールドカツプ』

【ZINEID】

N2848P

【作者名】

84g

【あらすじ】

2010年12月3日、小学生たちが昨晩の衝撃的発表を語り合いう。

NASAが発表した『ヒ素生命』を原作に、その日の内にSFに加工。

…宇宙人発見の報告じゃなくガッカリしたとか、言つたな。

2010年12月3日

「おはよー……」

「おはよう、宇宙人大好きのヤマオカくん…どうしたんだい、随分眠そうだね」

「昨日はアメリカのNASAが宇宙生物について重大な発表をする、つて云つてたじやんか…ニコース好きのイソベ」

「無理に名前を紹介してくれた感じでありがとう。

「そうだね、四時発表ってことで僕も早起きしたよ」

イソベ少年の切り返しに、ヤマオカ少年は背負つていたランダセルをすべり落としていた。

「…そつかつ、早起きつていう方もあつたのか！」

「…ああ、なるほど、ヤマオカくん、キミはずつと起きていたんだね、見てから寝たの？」

「寝たら起れねえだろ、しょうがないから授業始まつてから寝るわ」

「…潔いくらいダメダメな感じの小学生スピーチをどうもありがとう。」

「まあ、でも、それに見合つ発表だったよね、さすがNASAって感じ」

イソベ少年の切り返しに、ヤマオカ少年は銜えていたトーストをすべり落とし…そうになつたが口でキャッチした。

「本気で云つてんのかよ、イソベ？」

「宇宙人が見つかつたってニュースかと思つたらただのウイルスだぜ？」

「もつとタガ型の火星人とか、そういうのが出るかと思つたらよお…」

「だから、その宇宙生物が存在する可能性が格段にあがつた、っていうニュースだつたじやない」

「あ？　どこがよ？」

「んー、つまりさ…要約するけど、知つてれば読み飛ばしてもいいから」

「？　なにが？」

「）うちの話。つまりさ、今回のNASAの発表は新種ウイルスお披露目だつただろ？」

「それは判る、つていうか新種のウイルスなんて別に珍しくないだろ」

ヤマオカ少年の「）」に、新種のウイルス自体は珍しくはない。猛烈なスピードで進化・淘汰を繰り返すため、人工の是非かどうかの是非を問わず、湧くように発生する新種。

または以前から存在していたが、人類が認知できなかつたウイルス…様々だ。

「そなんだけど、このウイルスはとても変わつた特性を持つているんだ」

「なに、感染するとゾンビかヴァンパイアにでもなんの？」

「…キミ、見たんじゃないの？」

「いやあ、眠かつたし…上の空、つづーやつだ」

呆れつつイソベは説明を続ける。

「……そこまで直接的じゃないよ。

ウイルスもDNA…いわゆる生命の設計図を持っているんだ。
このDNAは元素…つまり、素材として炭素やリンを含んでいるんだ。

これは僕やヤマオカくんとか、他の全ての人たち…それ以外の全ての生き物のDNAはそうやって出来ているはずだつたんだ

思わずぶりに言い回しに、ヤマオカも思い出した。

「そういうや、そのウイルスはDNAにリンじゃなく、ヒ素だからこのを含んでるんだつけか」

「それそれ。モノ湖つていう強アルカリでヒ素を含んでいて、生息できないはずの死の湖だつたんだ。

だけど、そんな環境でもDNAという生物の大前提であるはずの条件を超えて…。

不可能を可能にした、そこで繁栄しているウイルスがあつたんだ！」

「え？と…感動的…なのか？」

「もちろん！ だがそれだけじゃない、これはキミの大好きな宇宙人にもつながる話なんだ！」

ヤマオカがイソベの熱意についていけなくなっていること、もうひとりの友人が登校してきた。

「おはよー…」

「よお、サッカー大好きのヒトムラじゅんか、お前も寝不足か？」

「昨日の発表をライブで見たくてさ…」

「ヒトムラくんも興味あつたの？ NASA」

「あ？ なんだそれ？」

ワールドカップの開催地に決まつてんだろ？」

2020年…俺が「リーガー」やつてる頃に日本でやれるかどうかだったのによオ…カタールになつちまつた

昨日は国際的注目が集まる深夜発表がふたつあった。
ひとつはイソベとヤマオカの見たNASA発表。
ヒデムラの見たのはもうひとりの方で、FIFAのワールドカップ開催地の話だ。

「日本は2002年にやつたばかりだから、しょうがないんじゃない？」

「ざけんなイソベ、そんとき俺は幼稚園児で、オヤジの録画でしか見てないんだよ。

サッカーは録画よりライブ、テレビよりスタジアム、もちろん観るより蹴る、だ！」

「ドーハの悲劇のリベンジができるし、それはそれで良いんじやないの？」

「それは当然だ、今度はイラクなんぞロスタイルで撃破してやらア」

「…ロスタイルに頼らなくとも圧勝する、ぐらい云つてよ…」

サッカーが判らず完全に取り残されているヤマオカの視線に、そのときやつとイソベは気が付いた。

ちなみにドーハの悲劇とは、94年の大会で日本が予選突破を目前にしつつ、ロスタイルによる失点でオジヤンになつたという事件である。

「えーっと、どこまで話したっけ」

「…結局、ヒ素生物がどうして宇宙人につながるんだ？」

「あ、ああ、うん、それはね。

太陽系銀河の中で、宇宙人が存在するとしたらエウロパやタイ

タンじゃないか、って云われてたよね？」

「エウロパには生命に必要な水があるからな。タイタンの方は代用になるメタンがあるし」

サッカーはわからないが、そういうことは即答できる辺りが宇宙人バカなヤマオカ少年。

「だけど、今回の発見でその前提がちょっと変わったんだ」

「あ」

宇宙人バカ、自発的に気が付く。

「…つまり、こうこう」とか？

ヒ素で生命が育てるなら、水素やヘリウム…つまり、木星みたいな星でも何かいるかもしね、ってことか！？

「正解」

「う、ウオおおおおおつ！ スゲェーーツッ！」

眠気を焼き尽くすように、ヤマオカの宇宙人への情熱が猛つている。

これなら授業中も眠らないだろう。宇宙人のことを考えてどっちにしろ授業の内容は聞かないだろうが。

「火星人が、木星人や金星人よりSFで登場機会が多いかつていいえば、水があるとされてたからなんだ。

だけど、この発見で火星生命ほどでなくとも、他の真空以外の星ならどこにでも存在する可能性ができたんだ」

「…あー、ベガルタ残留するかな、九分九厘決まってるけど、ここまで足踏みしたベガルタだしなア」

例によつて宇宙人に興味のないビデムラは、既に佳境のJリーグのことを考えていた。

ベガルタは、勝つか引き分けでJ1残留を決められるという状況が続きながら、決めきれなかつたというビデムラが応援するチーム。詳しいところは省くが、今週の最終戦に全てが懸かっている。

余談となるが、ベガルタは七夕祭りが有名な仙台をホームとしているチームである。

そのため、織姫と彦星…つまり、ベガとアルタイルからチーム名をベガルタとしている。

ベガやアルタイルが所属する大鷲座から、マスコットキャラクターには鷲を採用していた。

「…とにかく、俺が入るまでJ1に居て欲しいな…」

俺が入つたらカタールのワールドカップも優勝だ…2018年のロシアでも勝つけどな」

「あー、2020年頃には本当に木星人や金星人が見つかるといなあ」

起きいていて夢を見られるヤマオカとビデムラは、眠つて夢を見る必要は皆無。

そのふたりをイソベが眺めつつ、この物語は完結するが、続きもある。

2020年7月10日

『ああ、やつてまいりました、カタールワールドカップ決勝トーナメント』

ナメント！

ついにここまで来たぞ、われらの日本代表！ 悲願のワールドカップ一回戦突破なるか！

実況はわたくし、ゼブラ白馬がお送りします！』

『10』が刻印されたユニホームを着込み、ヒデムラは子どもの頃から変わらない情熱を滾らせていた。

ついにここまで来たのだ、決勝トーナメント一回戦。日本にとつてはひとつ目の目標でありながら、通過点にしなければならない試合。

サッカー界にも様々な進歩や激動たる出来事があつたが、ともにとかくにも勝たねばならないのだ。

『一回戦第四試合は、日本対木星第三。

木星第三は、ガリレオ衛星出身者で構成されており、

平均身長一百四十センチという木星人の中では例外的のチームで、平均身長百九十七センチと比較的小柄。

しかし、フィールド中央でのボールコントロールに定評があり、予選リーグでは全戦全勝の強豪です』

ヘルium生命である木星人は、地球人より圧倒的に軽い。さらに重力が強く竜巻が吹き荒れる木星という過酷な環境下で鍛えぬいた屈強な肉体を持つ。

軽量な肉体とパワーに長け、イタリア人監督の下に練磨された攻撃力に長けるチームだ。

『この試合を勝利したチームが、ベガ系合同チームを破ったイランとの対戦となります。

わあ、キックオフまでのカウントダウンです！』

ベガ系合同チームには、日本に帰化してからベガルタ仙台に参加していたアルタイル星人のドゥッパ選手がいた。

ヒデムラと同じくフォワードを任せられ、名コンビと称されたアタッカーだ。

「どうやら、イランに返さなきやいけない借りがふたつになつたな…。

ドーハの悲劇だけじゃなく、ドゥッパのリベンジも兼任だ」

最初から負けられる試合ではない。

大宇宙広しといえど、負けてもいい試合なんというものはサッカーの歴史においてはない。

…いや、まあ、予選一位で突破すると他リーグの強いところと当たるから、予選一位で突破するために負けたということはあつたが…。

ともかくにも、トーナメントは負ければ終わる。

『ああ、キックオフです!』

ホイッスルの音が量子通信によつて全宇宙に放映される。優勝に向けて、二十二のスパイクが地球を回すように深く踏み込む。

(後書き)

えー、唐突ですが、空想科学祭2010といつイベントがありまして。

投票形式の企画だったんですが、結果として大敗しまして。参加することに意味があるとは思つのですが、やはり勝つて終りたかった。

次のチャンスがあるかはわかりませんが、あるならばリベンジしたい。

というわけで文章修業中。

賞賛から辛口、激評、酷評、なんでも歓迎。

へ口みはしますが、倍は膨らむ自信があるのでガンガン叩いて下さつて結構です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2848p/>

時事ネタSFショートショート劇場『ヒ素ウイルスとワールドカップ』
2010年12月10日22時52分発行